

聖書の探求・意味の再発見としての教父の聖書解釈

出村 みや子

今年（二〇一七年）は宗教改革五〇〇周年の記念の年で、国内外で宗教改革に関する文献が数多く出版され、講演会や記念行事も各地で行われた。私の勤務するプロテスタントの大学でも、宗教改革を記念した学術講演会やシンポジウムがこの夏から六回開催され、一般聴衆の方々の宗教改革に対する関心の高さを実感している。

宗教改革についてはさまざまな見方があるが、教父研究に携わる者としては、聖書が時代に応じてどのように解釈され、時にそれが社会に大きく作用して歴史の転換点を画してきたかを改めて実感させられる出来事の一つであるように思う。マルティン・ルターに始まる宗教改革が聖書解釈や翻訳を通じてそれまでの中世世界の教会制度を大きく転換させ、近代市民社会の幕開けとなったことは広く知られているが、ルターの宗教改革の原動力となったのが、パウロ書簡に記された「神の義」の再発見であった。ルターは

ローマの信徒への手紙一・一七に記された「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりでである」との言葉から「信仰義認」の理解に至ったのだった。

古代教会史上重要な出来事もまた、聖書の言葉の再発見として記録されてきたことは興味深い。修道制の父と呼ばれるアントニウスが砂漠に赴ききっかけが、教会でマタイ福音書の一節「もし完全になりたいのなら、行つて持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」（一九・二一）が読まれるのを聞いたことだったことが、アタナシウスの『アントニウス伝』に記されている。アウグステイヌスの『告白』に記された庭園における彼の回心のエピソードには、この『アントニウス伝』を読んで回心したことをポンテキミアヌスから聞いたアウグステイヌスが、自らの歩みを振り返り、これまでの肉の習慣から抜け出そうと葛藤する場面がある。そこには苦悩するアウグステイヌスの耳に、「取りて読め、取りて読め」との子どもたちの歌声が響き、彼が部屋に帰つて手に取ったのがローマの信徒への手紙一三・一三一―一四であったことが印象深く記述されている。

私が現在研究している古代末期のアレクサンドリアで活躍した三人の神学者、ユダヤ人哲学者フィロン、クレメンス、オリゲネスの聖書解釈も、古代社会の教養に基づく価値観や人間観を大きく変えることになった。古代都市アレクサンドリアはホメロスを中心とした文献学が発展し、特に古代の神話的記述に潜む隠された意味をテクストから読み取ろうとするアレグリー解釈が発展した地であり、また旧約聖書のギリシア語訳『七十人訳聖書』もこの地で成立している。

キリスト教会における聖書解釈の伝統の嚆矢となったのがフィロンである。彼は『予備教育』(De

『Congressu』において創世記一六章におけるサラとハガルの物語の背後に、予備教育と哲学および知恵との関係を見る聖書解釈の伝統に先鞭をつけた。その後アレクサンドリアのクレメンスがキリスト教の立場からフィロンの議論を継承、独自に発展させている。創世記一六章のサラとハガルの物語の解釈はまた、パウロがガラテヤの信徒への手紙四・二一―三一において二つの契約の比喩として取り上げたことでも知られるが、パウロの議論を受けてそれを独自の聖書解釈法に適用したのがオリゲネスであり、彼の聖書解釈はその後の聖書解釈の伝統にさまざまな影響を与えた。創世記一六章のサラとハガルの物語に関するこうした一連の解釈が時を隔てて中世の神学と哲学の関係を示す定式「神学の侍女 (*ancilla theologiae*)」としての哲学」につながっていったとすれば、その出発点をなすアレクサンドリアの聖書解釈の伝統を明らかにすることは、古代教会史や西欧思想史に新たな光を当てることになる。

オリゲネスの神学的遺産をめぐっては、彼の死後に聖書伝承とは異質な思弁的アレゴリー解釈を教会に持ち込んだという嫌疑でオリゲネス主義論争が生じたために、彼は六世紀に異端として断罪された。しかし近年彼の数多くの聖書注解や聖書講話の研究の進展に伴い、この時に断罪された思想が必ずしもオリゲネス自身のものではなかったことが徐々に明らかになってきた。そして後代の教父たちや宗教改革期のエラスムスにも多大な影響を与えた聖書解釈者として、オリゲネスの神学的著作が再評価されているのである。先に言及したアウグスティヌスがマニ教の聖書理解から正統的教会の聖書理解に立ち戻るきっかけが、アンブロシウスの説教において旧約聖書の多くの箇所が霊的に解釈されるのを聞いたことであつたと言われているが、これはオリゲネスを始めとする東方の聖書解釈の伝統的解釈法であつた。またアウグスティヌスがペラギウス論争に着手した最初の著作である『罪の報いと赦し (*De peccatorum meritis et remissione*)』に

は、オリゲネスによる『ローマ書注解』（ラテン語訳）の影響がはつきりと読み取れるのである。

多様な価値が競合する古代末期に活躍した教父たちの著作の遺産を振り返ることは、国境を超えてさまざまな情報や価値観が交錯する現代社会に生きる現代人が、今なお歴史の流れを通じて変わらぬものに目を注ぎ、自らの生の根源を探究する一つの手がかりを与えてくれるように思う。歴史の検証に耐え、現代にまで継承された聖書の意味を、時代や地域を超えて共に考えることのできる場として、教父研究の意味は大きいと思う。

（むら・みやこ 東北学院大学教授）